

初期ロータリーの歴史

今日は「初期ロータリーの歴史」というテーマをいただいております。実は、初期ロータリーを詳しく解説したものは、中央大学名誉教授の小堀憲助先生の論説以外には殆ど見当たりません。そこで今日は、私が小堀先生の講義を聴いたところを私なりに理解し整理したことをお話し申し上げます。したがって私の話にもし間違えがあれば、それは私の理解が間違っていたことと御了承下さい。

さて、そこで、**歴史**と申しまして、色々なaspect側面があります。

先ず、歴史を**現象**の世界で捉えると**制度の歴史**となります。例えば、頼山陽の「日本外史」は、鎌倉幕府以降の武家頭領の血脈の歴史でありまして、これは謂わば現象の歴史、即ち外なる歴史、外史であります。これに対し、歴史を**本質**の世界で捉えると**思想**としての歴史、即ち内なる歴史、内史となります。これは制度の背後にある人間の思想の歴史であります。

このように、歴史には、一つは制度の歴史(外なる歴史)があり、他は思想の歴史(内なる歴史)があります。そこで、初期ロータリーの歴史についても、現象の歴史即ち外史と、本質の歴史即ち、内史とに分けて考えることが出来るのでありますが、今日は時間の関係で、主として制度の歴史即ち、外史についてお話し申し上げたいと思います。

また、初期ロータリーと謂うのは、一体何時から何時までの時期を謂うのかという問題もありますが、一応、1905年から1927年までの期間を初期ロータリーと考えて話を致します。何故なら、その期間は、ロータリーが創立以来、諸々の原理開発を終えて原理探求のロータリーから実践のロータリーへ入っていくまでの期間だからであります。それはロータリーの倫理運動としての爛熟期とも云える時期であります。

さてそこで、**20世紀の初め**、シカゴの町の片隅に真に小さな集いが生まれました。そのエネルギーがやがてアメリカ全土に拡がり、遂には世界中に拡がっていきました。それが後に至ってロータリーと呼ばれる運動体でありました。**そのエネルギーの源泉は一体何か**。ロータリーは「**始めに親睦ありき**」。その親睦のエネルギーが、やがて奉仕を生み、その親睦と奉仕のエネルギーが、シカゴの町からアメリカ全土に拡がり、やがて国境を越えて世界中に拡がって行ったのであります。

では、**何故、地域社会から世界社会へと拡がって行ったのか**。

それを語るには、ロータリーのそもそもの濫觴の物語から始めなければなりません。そこで、この親睦と奉仕のエネルギーを生み出した原点は一体何か。

それはポール・ハリスという1人の青年弁護士の頭脳に宿った只一滴の発想、即ち、一業種一会員制の発想でありました。一つの職種から1人だけ会員を選ぶ、そのようにして選ばれた良質な職業人のクラブ、その親睦のエネルギーが、やがて世のため人のための奉仕という考え方を生み出したのであります。そして、世のため人のためのクラブであれば、それはシカゴにだけあるべき筋合いのものではない、全米の地域社会にあって然るべきものであるという考え方に

なり、サンフランシスコを始めとして各地にクラブを作るようになり、ロータリーの拡大が始まったのであります。このようにして、**親睦が奉仕を生み、奉仕が拡大を生んだ**のでありまして、そのそもそもの濫觴は親睦であったのであります。

さて、ロータリーは、1905年に創立されて以来、ポール・ハリスはじめロータリーの指導者達が高々と理想を掲げて様々な原理・原則を開発し、創立後僅か4分の1世紀にして素晴らしい原理の体系な築き上げたのであります。その期間は、1905年から1927年までの22年間でありました。

そこで先ず、1927年までの初期ロータリーの**原理・原則の開発の流れ**というものを振り返ってみたいのであります。そして、時間の関係で、そのうち重要な論点についてだけ現象史的に申し述べたいと思うのであります。

1905年2月23日、ポール・ハリスは、最初の会合で一つの職種から人だけ会員を選ぶという「**一業一会員制の原則**」を決め、次いで、3月23日、シカゴ・クラブの**創立総会**において、「**規則的例会出席の原則**」を採択しました。これらは何れもクラブの親睦を守るための基本原則でありますから、この時点では親睦だけのロータリーでありました。

ところが**1906年春、ドナルド・カーター**の物語が起こりました。それはどのような話しかといえますと、先ず、**Donald Carter**は、職業分類は日本流に言えば弁理士でありますが大アメリカ流に言えば特許専門の弁護士であります。シカゴ・クラブ二代目会長アルバート・ホワイト Albert Whiteの時、フレデリック・ツイード Frederic Tweedが Donald Carterにクラブへの入会を勧誘したところ、Donald Carterはクラブの互惠主義の説明を聞いて、『君達はお互いに助け合って、豊かになって楽しいだろう。しかし、**一業一会員制の原則であれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持たない一般地域社会の人達は一体どうなるのか。私達は、この地域社会に生まれ、地域社会に育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に何らの恩返しもしない。何らの足跡も残さないで、自分達だけが助け合って隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は永続性がないだろう。自分は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことはできない**』と言って入会を断ったのであります。これを聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。

『**Carterの言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう**』と言って、職業人の親睦のエネルギーを世のため人のために使おうと考えるに至ったのであります。

実は、この Donald Carterの忠告から出てくるポール・ハリスの反省が、ロータリーにおける**奉仕概念の誕生の物語**でありました。と同時に、それは、**ロータリー拡大の系譜**の始まりでもありました。何故なら、先程申し上げたようにロータリーが親睦だけの仲良しクラブであれば、それはシカゴにだけあれば充分であって他に作る必要はないのであります。世のため人のための奉仕を目的とするクラブであるならば、シカゴだけでなく全米の地域社会にあって然るべきものだと言う**ロータリー拡大の理念**が出てくるからであります。

要するに、1906年以前にはロータリーに奉仕という考え方はありませんでした。ただ、職業人

の淋しさ、心の渇きを癒すためにロータリークラブを作ったに過ぎなかったのであります。それは**親睦と相互扶助の世界**でありました。

したがって、1906年春に至って、Donald Carterの外部的な刺激により、初めてロータリーの世界に『**我らの親睦のエネルギーを世のため人のために**』という奉仕の考え方が出てきたわけであります。

そして、1907年、アーサー・フレデリック・シェルドンによって原理的にロータリーの**奉仕概念**が開発・完成されて、**親睦だけのロータリーが親睦と奉仕のロータリーへと変化したのであります。**

そして、**1908年以降**、サンフランシスコ・クラブを初め次々にロータリーの**拡大**が始まり、1910年、当時全米に存在した16クラブをもって全米ロータリー・クラブ連合会が設立されました。

そして、**1915年**、サンフランシスコ国際大会において「**全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓**」所謂「ロータリー倫理訓」を採択し、1919年、ソルトレイクシティ国際大会において国際奉仕の概念を開発して更に、1921年、エディンバラにおいて国際奉仕の概念を完成しました。

そして**1922年**、ロサンゼルス国際大会において「**RIの定款細則及び標準クラブ定款**」を採択、その翌年の1923年、セントルイス国際大会において奉仕の実践に関する**決議23-34号**を採択したのであります。このようにして、ロータリーは、**1923年までの18年間に**立て続けに原理・原則を開発していったのであります。

ところで、初期ロータリーのこの**原理開発の過程**を分析しますと、**原理体系の核となる三つの柱**を見取ることが出来ます。

第1の柱は、ロータリアンの**個人倫理の確立の場面**であり、ロータリー運動の中核をなす部分であります。

即ち、1915年のサンフランシスコ国際大会において、**【全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓】**所謂**【ロータリー倫理訓】**を採択し、ロータリアンの個人倫理を確立しました。これは、ロータリーの奉仕をロータリアンの**個人倫理の問題として集大成**したものであり、まさにロータリーの**倫理運動としてのハイライト**でありました。

第2の柱は、ロータリーを運動体として構成する定款細則論の場面即ち、ロータリーの**組織原理の確立の場面**であります。即ち、優秀なロータリー思想を慕って沢山の人が集まってきました。でも、そのままでは烏合の衆にすぎません。これを**合理的に管理する原則**が必要なのであります。そこで、ロータリーは1922年、ロサンゼルスの国際大会の決議により、「**国際ロータリーの定款・細則**」及び「**標準クラブ定款**」を採択し、ロータリーの組織原理を確立しました。これはロータリーの**組織を運動体の側面から集大成**したものであります。

このように、ロータリーの本質を分析する場合には、一つは、ロータリー思想の中心から眺めることによって**個人倫理の要素**を分析することであり、一つは、ロータリーを**運動体として**分析することでありまして、この二つのルートから分析することによってロータリーの本質は解ったのであります。実は、その当時のロータリーが原理形成の過程で最後に一つだけ残した課題は、**奉仕の実践の問題をどのように処理するか**ということでありました。

そこで、第3の柱として、1923年セントルイス国際大会の決議により奉仕の実践に関する『決議23-34号』を採択し、実践原理を確立したのであります。これは、実践の視点からするロータリー思想の集大成でありました。

このようにして、ロータリーは、原理のロータリーから実践のロータリーへと一歩を踏み出したのであり、ロータリーの奉仕哲学上残されていた最後の課題は実践の問題であったのであります。

このことについてポール・ハリス Paul P. Harrisは、1934年の著書【This Rotarian Age】の中で『我々は、言うべきことは全て言い尽くした。しかし、為すべきことは未だ何一つ為されていない。これからは実践のロータリーに邁進しよう』と謂っているのであります。

ただ、このようにして原理の体系は確立しましたが、この確立された原理を具体的に如何に実践すべきか、については未だ何も決まっていなかったのであります。

そこでロータリーは4年間沈黙思考した結果、1927年、国際ロータリー理事会によって四大奉仕の概念を開発するに至るのであります。

このようにして、ロータリーの世界に職業奉仕をはじめ四大奉仕の概念が現れたのは1927年、ロータリー設立後22年経ってからのことでありました。

以上、申し述べましたことから、この話の冒頭に初期ロータリーを1905年から1927年までの期間に区切ったことの意味がお解りいただけたかと思えます。

ところで、今まで申し上げたことは、1927年までの諸々の制度の簡単な概説にすぎませんが、これらの全てにわたってお話することは時間の関係で到底出来ません。そこで、論点を二つに絞ります。

- 一つは、1905年からのロータリー・クラブの濫觴に関する事、
- 一つは、奉仕の実践に関する決議23-34号に関する事でありました。

さて、ここで話を1905年時点に戻します。

先ず、ロータリーは「始めに親睦ありき」。親睦から始まったロータリーが地域社会に拡大されていった過程を今一度、詳しく現象として眺めてみたいのであります。

さて1905年2月23日、一業種一会員制を柱とする職業人の社交クラブの第一回目の会合がシカゴの町のNorth Dearborn街のUnity Buildの711号室で開かれました。そこで、ポール・ハリスは鉦山技師 Gustavus Loehr、洋服屋のHiram Shorey、石炭商のSylvester Shieleと4人で話し合ったのであります。

ポール・ハリスは、お互いに仲良くなって親類付き合いをして、互いに助け合う職業人のクラブを作ろう、そのためには、一職種から人だけ会員を採るようにして同業者を排除すれば、職業人同士でも親類付き合いが出来るということを提唱しました。そして、4人はその原理を確認したのであります。

そして、第2回目の会合までに新たに2名の会員が入会しました。一人は印刷業のHarry Ruggles、他の一人は不動産業者のWilliam Jensonであります。この2回目の会合までに参加した

6名の会員は、Pioneer Veteranと謂って別格のロータリアン扱いにされる傾向がありますが、この中でも、優れた人も居たがそうでない人も居たのであり、これは人間だから当然のことです。

そこで、以下、簡単にその人物像に触れておきます。

1. **Gustavus Loehr** 職業分類は鉱山技師。第1回目の会合に事務所を提供しました。鉱山技師は不安定な業界でありますから、或る日、突然破産して、自殺によってこの世を去ったために、かなり骨のある職業人であったと言われていたのですが、彼の功績は何一つとして初期ロータリー発展の記録の中に残されていないのであります。
2. **Sylvester Shiele** 職業分類は石炭商。シカゴロータリー・クラブの初代会長。第3回目の会合に事務所を提供しました。大変世話好きな職業人でありまして、終生、ロータリー運動の発展について深い関心を持ち、ポール・ハリスの良き相談相手でありました。墓も並んで立っています。
3. **Hiram Shorey** 職業分類は洋服商。非常に打算的な人であったと言われていた。会員が増えれば、洋服は全部自分のところで作れるとなると商売もうまくいく、というように何時も算盤を弾いていたと言われていた。したがって、あまり大したロータリアンではありませんでした。
4. **William Jensen** 職業分類は不動産業者。第2回目の会合から参加しました。1907年のシカゴ・クラブの幹事でありましたが、シカゴ・クラブでは、その頃から奉仕派と親睦派との紛争が起こったためシカゴ・クラブに嫌気がさしてロータリー・クラブを退会しましたので、この人もあまり大したロータリアンではなかったと謂えます。
5. **Harry Ruggles** 職業分類は印刷業者。ロータリークラブに5番目に入会したので第5ロータリアンとも呼ばれています。この人は、Charles A. Newton、Dr. William R. Neffと共に初期のシカゴクラブの管理権者を握った親睦派の大立者でありまして、終生、ポール・ハリスの政敵でありました。

所謂、パイオニア・ヴェテラン6名の中で大学を出たのはポール・ハリスとこのHarry Rugglesの二人だけでありまして、彼は一見、杓子定規な融通のきかない男でありましたが、クラブ親睦を守るために、ロータリーソングの慣例を作り出したことで有名であります。ロータリーのバッジ(エンブレム)も作っており、立派なロータリアンでありました。

彼は若くして苦学をして、North Western大学の夜学に入り、生活費を得るために印刷工場で働きましたが、この社長から見込まれてその会社の持ち株を半分譲り渡され、経営者たる地位に就きました。

Harry Rugglesは大変長生きそして、カリフォルニアに別荘を造り、カリフォルニアのロータリー・クラブの会員になり、初期ロータリアンの中で、これ位クラブライフを楽しんだ人は居ない、と言われるくらい立派なロータリアンでありました。彼には、色々のエピソードがありますが、時間の関係で割愛します。

以上がパイオニア・ヴェテラン6名のプロフィールであります。

次に、1905年3月9日、第2回目の会合はポール・ハリスの弁護士事務所で開催されました。この時は【職場持ち回りの原則】を決めています。その趣旨は、我々は一職種から1人だけ参加して、お互いに心を通わせ理解し合おうということであるから、職場を中心に例会を開こうということでありました。

ただ、しかし、この原則は、ロータリーの初期の慣行の中では比較的早く維持できなくなりました。先ず第一に、会員が増えますから、職場では会場としては、手狭になってきます。

更に、第6回目の会合が開かれたときに、3回目の会合から参加したCharles A. Newtonが食事をしていたために例会に遅刻しました。その事が契機となって、例会で食事を共にしようということになり、レストラン持ち回りとなりました。したがって、職場持ち回りの原則は、Charles A. Newtonの出来事があってから、いち早く修正されてしまったのであります。

そこで、第3回目の会合までに参加した会員は3名であります。

1. Charles A. Newton 職業分類は損害保険の代理業者。この人は、Harry Ruggles、Dr. William R. Neffと共に初期シカゴクラブの親睦派の大黒柱であったと同時に、初期ロータリーの慣例を悉く記憶していたと謂います。この故に、初期ロータリーの【稗田の阿礼】と言われていました。判らないことは、Charles A. Newtonに聞けば凡そ正しいことは覚えていたと謂います。

彼は、1923年度のシカゴ・クラブの会長職を務めましたが、その時に、何時までも人間の記憶にだけに頼ってはいけないというので、シカゴ・クラブの歴史編纂事業に手を付け、歴史委員会History Committeeを作りました。ロータリアンが、歴史付くのは1924年以降のことです。ありますから、Charles A. Newtonは、今日のロータリーの軌跡を勉強するについて、その出発点になった大ロータリアンであったことが判るのであります。

なお、Charles A. Newtonは、損害保険の代理業者でありましたから、一業一会員制の原則によって、シカゴ・クラブに入会できなかった同業者のMelvin Johnsがbusiness Circleというクラブに入会し、後に至って1917年ライオンズ国際協会を設立するに至るといふ因縁を持っているのであります。

2. Albert White 職業分類はオルガン製造業者。シカゴ・クラブの第2代会長であり、この人の会長の時に、有名なDonald Carterの物語が起こったので、あります。
 3. Arthur Irwin 職業分類は洗濯業者。この人も、ポール・ハリスが奉仕を提唱したときに、ポール・ハリスの懐刀となって、いつもポール・ハリスの側にいたと謂われています。
- このように、第3回目の会合までに入会した3名は、皆立派なロータリアンでありました。

そして、1905年3月23日、第3回目の会合がSylvester ShieleのCoal Yard石炭置場で開催されました。参加人員9名。ポール・ハリスは、会員9名というの社交クラブの会員数としては何とでも少ない。そこで、もう一回会合を持って更に会員の増強を計るべきか、或いは、取り敢えず9名で出発して、そのあとで会員を増強したほうがいいのか、という政策判断に迫られます。

そこで結局、彼は、『今や機は熟したので、役員任命を行うべきである』という提案をした

のであります。

この会合が、法律的に見れば**創立總會**に当たります。何故なら、クラブ役員の任命、クラブ名称の決定、会員資格に関する原則等が決定されているからであります。

① 役員の任命

会長については、ポール・ハリスが自薦をしてもよかったのでありますが、彼は、この種の運動が成功するためには互譲の精神が大切であると考えて、自分は一步譲ったのであります。そして、Sylvester Shieleが世話好きな男で指導者としてふさわしい男でありましたので、このよき日よき場所を記念する意味において、ここの経営者であるSylvester Shieleを初代会長にしようとポール・ハリスが提案したのであります。その結果、初代会長**Sylvester Shiele**、記録担当幹事Hiram Shorey、通信担当幹事William Jenson、会計Harry Rugglesが選任されたのであります。**SAA**(Sergeant At Arms)は、現在はクラブ役員であります、この当時は未だ存在しません。これは1906年になって正式の職制として登場します。

② Initiation Speech

Sylvester Shieleは、この日を記念して【石炭業界の展望に就いて】というスピーチをしているのでありますが、これが、実は、ロータリーの慣例の中におけるInitiation Speech第1号であります。この当時は、未だ奉仕という概念はありませんでしたが、ロータリー運動の中におけるInitiation Speechの位置づけを正しく示していると謂えるのであります。

本来、Initiation Speechというものは、会員が職業分類によって示された自分の職業を営むに当たって、どのような職業観を形成するに至ったかと謂うことを同僚の会員に対して開陳するものであります。これは、ロータリークラブが職業人のクラブであり、職業分類クラブ(Classification Club)であることの当然の帰結なのであります。

「自分は、今まで斯く斯く職業を営んで来て、今般、ロータリー・クラブに入会させて貰ったが、その職業を営むについては、斯く斯くの職業観・経営哲学を持っている。至らないところは教えて頂きたい。これから仲良くお付き合いを願いたい」という趣旨のことだけでよいのであります。

現在のInitiation Speechというのは、新入会員が、長々と自分の履歴を喋って居るのが通例ですが、ロータリー・クラブが職業分類クラブの性格を持っていることを考えますと、これは、肝心なところを忘れているものと謂わなければなりません。

③ 会員資格に関する原則

「4回連続して欠席したる者は自動的に会員資格を喪失すべきものと定む」という原則が、この会合の議事録に載っています。この原則は、ロータリー運動の創立總會の場で、既に原則化されていたわけでありませぬ。

④ クラブ名称の決定

これは会員の共通の関心事でありました。ところがポール・ハリスが、皆のクラブだから名称の決定は全員一致で決定しようと提案したため、結論が出なくなってしまったのであります。何故ならば、全員一致の決定というのは、神様の世界の出来事か、或いは、人間の世界であれば、余

程不真面目な人間の集まりでなければ、望むべくもないことなのであります。

では、どのような名称が提案されたのか。

Conspirator's Clubこれはポール・ハリスの提案でありましたが、共犯者という意味もあるのではずされました。ほかにはThe Roundtable Club、Booster Club、Chicago Circle、The Chicago Fellowship、The Lake Club等々。

要するに、クラブ名の討議で議論は沸騰しましたが、衆議一決しないため、皆が疲れてしまって、挙句の果てに、もう名前などはどうでもよいから議論をやめようと言いだした時に、誰かが提案して、

『役員も、例会場も持ち回るのだから、持ち回りという意味で、輪番という言葉、つまり、ロータリーという言葉をつけたいのではないか』と言った時には、もう誰も反論するだけの力が残っていなかったのもうどうでもよいから、それにしようということでロータリー・クラブに決まってしまったというのであります。

さて、以上のようにして、ロータリーは始まったのでありますが、このクラブは一体、他の職業人の団体とは、どの点が基本的に違うのか。職業人の親睦団体ではあるが何を本質とするのか？

要するに、これは2週間に1回皆が集まって、互いに親類付き合いをする団体であるとは謂えますが、では、親類付き合いの具体的な内等は一体何か？

このクラブには、同業者は一人も居ないのでありますから、皆で助け合うということもその点から考えて行かねばなりません。そこで、

第1に、物を買うときには会員から買うこと。そして、注文を受けた会員は、親類から注文を受けたのだから利益を計上せずに原価の取引をすること。

そして、例会と例会との間で、誰と誰とがどのような取引をしたかということ記録する役職を設け、これを統計係幹事Statisticianと呼んだのであります。

勿論、この原価の取引には色々と問題がありました。殊に、弁護士の報酬やお坊さんのお布施の原価は一体いくらなのかなど、専門職業Professionの側に問題があります。そこで、このような諸々の問題に対して、ポール・ハリスは、『あまり細かいことを採り上げても結論は出ないだろうから、一つその精神で行こうよ』という形でこの問題を乗り切ったのであります。これは、**教条主義**にならない、という意味では、ロータリーの原則を理解するには大変よいことでありました。

そして、

第2に、お互いの職業を宣伝し合うこと。

例会と例会との間で、地域社会の人から職業上の相談を受けた場合、例えば、誰かよい弁護士くれないかと頼まれたら、ポール・ハリスを紹介するというように、皆で会員の職業を宣伝し合ったのであります。

以上の二つのことをして、次の例会でそのことを報告させたのであります。このようにして、

やがて心が通い合うようになりますと、

第3に、精神的に助け合うことになりました。

会員が、自分の企業経営上の悩みとか、家庭の悩みとかをクラブに持ち寄って、**三人寄れば文殊の知恵**というように、皆で衆知を集めて解決して行ったのであります。この企業経営の助け合い運動の中から、1927年、職業奉仕という類稀なる概念が誕生するに至るのであります。

この企業経営の助け合いということは、つまり**経営相談**であります。ロータリー・クラブには同業者が居ませんから、皆**発想が異なります**。その意味では、ロータリー・クラブは、地域社会における**優秀な顧問団**という一面を持っていると謂えるのであります。

実は、ロータリーの本質は、**発想の交換Exchange of Idea**であるという基本的な考え方があります。古いロータリーの綱領の中には、この**発想の交換Exchange of Idea**という言葉が記されていたのであります。

ところが、1922年にこの言葉が削除されています。

それは一体何故か？

それはあまりにも当然なことであるので、書いておく必要がないと考えたからであります。ということは**発想の交換Exchange of Idea**というものは、ごく自然に行われることであってそれが奉仕のエネルギーになる、という自覚が1922年までにはロータリアンの心の中に出来上がっていたわけでありませぬ。

Exchange of Idea =精神的相互扶助

20年余りの後にロータリー的意味での奉仕概念に転化して行くのであります。したがって、1927年に誕生した職業奉仕の概念は、突如として、無から有を生じたのではなく、職業奉仕という言葉が生まれる前に、職業奉仕という実体に対応する柔軟な思考があり、それに基づく実践もあったわけでありませぬ。また、**職業奉仕に限らず、社会奉仕についても発想の交換Exchange of Idea**が奉仕のエネルギー源になっていたのであります。

そして、**第4に、会員の増強**であります。

ロータリアンは、会員を勧誘するときに何をSales pointにするか、という問題があります。大学卒も殆ど居ないし金持ちも居ない、何時倒産するか判らない零細企業の経営者達が社交クラブを作ったからといって、魅力がなければ誰も入会しないだろう。では、何を**Sales pointにすればいいのか？**そこで、『我々は、嘘をつかない誠実な人間である。この誠実な人間だけが、このクラブライフの功德を受けることが出来る』

このような説得の方法があるということを確認したのであります。

このようにして、**1. 同業者は入会できない。2. 誠実な人間しか入会できない。**この二つの原則によって、ロータリーは始まり、会員の増強を図って、お互いに助け合いながら楽しく1年余の歳月が経過したのであります。それは将に、親睦とお互いの助け合いだけの仲良しクラブでありませぬ。

ところが1906年4月、先程申し上げたように**Donald Carterの物語**が起こったのであります。この

Donald Carterの外部的な刺激によって、親睦と助け合いの世界に『**我らの親睦のエネルギーを世のため人のために**』という奉仕概念が出てきたわけでありませぬ。

これは、それまでのロータリーからすると全く異質の要素でありました。何故なら、クラブの親睦と相互扶助のエネルギーは、すべて会員同士のもので、あって、クラブの内に向けられたものでありますが、世のため人のためという奉仕のエネルギーは、クラブの外に向けられたものでありますから、エネルギーの方向が全く異なるからであります。したがって、1905年時点の考え方に立つHarry RugglesやCharles A. Newtonなどは、世のため人のための奉仕という考え方を一切認めませんでした。

『**クラブというものは、自分達だけの幸せを考えればよい。もともとそうであったし、これからもそうであるべきである**』という強い信念を持っていました。

しかし、ポール・ハリスはDonald Carterの忠告を受けて、今までのロータリーは、会員相互の幸せを考えたが、これからのロータリーは世のため人のためのことを考えなければならない、と考えたのであります。

この結果、ロータリークラブの**綱領が改正**されました。

従来の綱領は、第1項は**親睦**、第2項は**相互扶助**でありましたが、これに第3項として、**シカゴ市の利益を推進し、その市民の中に市民としての誇りと忠誠の誠心を普及すること**、を加えました。

そこで、彼は、このロータリーを新しい方向にリード出来るのはロータリーの生みの親である自分をおいて他にないと自覚しまして、1907年度のクラブ会長に自薦して就任したのであります。

ポール・ハリスが第3代目の会長になった理由は、

- 1 **理念の提唱** クラブの中で世のため人のための**奉仕理念を提唱**すること。
- 2 **ロータリーの拡大** 即ち、**奉仕理念を提唱する拠点**としてのロータリー・クラブを全米の諸都市に作っていくこと。したがって、奉仕理念の提唱とロータリーの拡大とは表裏一体の関係にあるのであります。

そこで彼は、会長席を借りて、人が変わったように奉仕理念を提唱したために、クラブ親睦を著しく壊してしまったのであります。

一方、Donald Carterは、ロータリー・クラブが彼の意見を入れて綱領を改正することを聞いて喜んで入会しました。そして、ポール・ハリスの片腕として動きました。

つまり、第3代目会長ポール・ハリスが、Donald Carterの提案を**クラブの事業計画の中に取り入れた**わけでありませぬ。

ところで、ポール・ハリスが会長になったシカゴ・クラブは、従来の**親睦と相互扶助**の世界に**奉仕**という全く異質なものが入って来たために**親睦が崩壊**してクラブは荒れに荒れるわけでありませぬ。当然のことながら会員の出席率も低下しました。

この状況を見て、当時の初代の親睦委員長であったDr. William R. Neffは、『**この状態があと一月続けば、このクラブも終わりだ**。親睦委員長として、何とかこの状況を打開する手を打たなけ

ればならない』と考えました。

その結果、Harry Rugglesに対して、クラブの雰囲気は奉仕の話でおかしくなった時には歌を唄ってほしいと要請したのであります。

Harry Rugglesもこの要請に応じて、クラブの雰囲気が冷たくなると『諸君、歌を唄おうHell, fellows “Let's sing!”』と言って歌唱指導をしました。

これが実は、**ロータリーソングの慣例**の始まりでありました。初期のロータリアンは、歌を唄うことにより童心と友情を取戻し、奉仕の議論から解放されて心と心を通わせることに成功したのであります。

しかし、当時のシカゴ・クラブでは、Harry Rugglesが歌によって親睦を盛り返すと、一方で、ポール・ハリスが奉仕の議論によって水を差す、という状況でありましたから、ポール・ハリスの**目的**など実現できる筈がありません。瞬く間に1年の歳月が流れて、ポール・ハリスの任期が満了します。この時、ポール・ハリスは、大きな過ちを犯しました。それは**会長の留任**でありました。

皆の心が冷え切った状況の中でポール・ハリスは留任しましたが、結局、ポール・ハリスは、会員の信頼を失って、1908年中頃に至り、会長職を投げ打つという悲惨な出来事となって事態に決着が付けられることとなります。

ところで、1908年、**ロータリー運動に重要な役割を果たした二人の大立者が入会**します。一人はアーサー・フレデリック・シェルドンArthur Frederic Sheldonであり、一人はChesley R. Perryであります。この二人はシカゴ・クラブに同時に入会したと謂われています。

1. Arthur Frederic Sheldon

ミシガン大学の経営学部を卒業して、ミシガン学派の経営理論を完全にマスターしていた経営哲学者。当時38歳。20世紀初頭のミシガン学派の経営理論というのは、今日のドラッカーの経営学に近いものであります。

ドラッカーの経営学というのは、企業経営を仏教的な意味における因縁論で割り切ります。即ち、企業組織は、資本家、経営者、従業員などの色々な人的因縁によって構成されますが、それらの人達が新たな因縁によって企業活動を行い、その因縁の結果として一定の利潤を得ることが出来ます。

したがって、その得た利益を分配するに際しては、その結果=利益を生み出した全ての因縁を逆算して、その原因の所に利益を配分するという理論であります。全ての原因の所に利潤を配分するのでありますから、利益は資本家だけがとると謂うことにはならない。顧客にも利益を還元するという形になります。この意味では、企業経営は同時に「**社会的責任**」、所謂「**企業の公共性**」を自覚したことになり得るのであります。

シェルドンは、この中で販売学という学問を開発した秀才でありました。このシェルドンの理論がロータリーにおける**職業奉仕の開発**に繋がるのであります。したがって、**職業奉仕**というのは、後に至ってドラッカーの経営学になったような思考を、もっと**根源的な形**でロータリーが**親睦=奉仕、職業=奉仕**という思考の中核部分に取り入れたものだと考えてよいと思うのであります。

その作業をしたのがシェルドンでありました。

2. Chesley R. Perry

この人は、後に国際ロータリーの組織を作った人であります。ポール・ハリスは、彼をロータリーのビルダーであると評したほど、彼は国際ロータリーの事務総長を32年間に宣って勤め上げた偉大なる組織管理者でありました。彼は、高校卒ではありますが、米西戦争では士官としてメキシコへ従軍して、用兵の術に秀でていたと謂われています。

ところで、ポール・ハリスの立場から見て、シェルドンの経営哲学の理論は、将にロータリーの**奉仕を世のため人のために**という理論と一致します。

そこで、時のシカゴ・クラブの会長ポール・ハリスは、1908年、子クラブを作る作業をクラブの組織活動の中に取り込みました。これが有名な「**宣伝拡大委員会**」Publicity and Extention Committeeであります。

宣伝というのは、CMではなくて、ロータリー思想を普及すること、即ち、ロータリー・クラブを作り、それを拠点としてロータリー思想を普及せしめること、これが**Publicity**であります。ポール・ハリスは、初代の宣伝拡大委員長に迷うことなくシェルドンを任命したのであります。

シェルドンは、これを大変光栄に思いまして、大陸横断鉄道はあったが交通機関が未だ発達していない当時でありましたが、子クラブを作る仕事について色々な基礎作業を組み、2週間毎にその経過報告をしたのであります。

ただ、彼は、例会時間が経過してもその報告を止めませんでしたので、クラブの親睦を著しく損ない、会員の反発を買うに至ったのであります。

そこで、急遽、例会を臨時総会に切り替え、**宣伝拡大委員長解任の動議**が提出されるに至ったのであります。

これは、親睦団体にとっては由々しきことでありまして、会長がこれに対して僅かに抵抗できるのは、提案そのものに就いての**賛否を問う所謂セコンドsecond**をすることだけであります。

そこで、ポール・ハリスがこの提案の賛否を問うたところ、当然のことながらセコンドがありました。そこで、提案の内容について賛成・反対の意見が述べられたあと表決をしたところ、圧倒的多数で原案指示、つまり、シェルドンは、**宣伝拡大委員長の職を解任せられる**に至ったのであります。

これは親睦団体としては革命的な出来事であり、ポール・ハリスはこの事態を見て、健康を理由に会長職を任期途中で辞任するに至ったのであります。

この革命的事件によって、**シカゴ・クラブの管理権**が奉仕派から親睦派に移ってしまいました。シカゴ・クラブは、最初は親睦だけでうまく行っていました。Harry Ruggles、Charles A. Newton、Dr. William R. Neff、そしてポール・ハリスがこの中心にありました。ところが、Donald Carterの忠告によってポール・ハリスが、『**親睦のエネルギーを世のため人のために**』と動き出し、これにシ

エルドンがくつつくようになって大喧嘩。そして、この二人が役職から排除せられるという革命的な事件となって親睦派の勝利となりました。そして、奉仕派は、やがて全米ロータリー・クラブ連合会へ居所を移すことになるわけでありました。

革命的事態は收拾しなければなりません。その中心人物は、Harry Ruggles、Charles A. Newton、Dr. William R. Neffの三人、所謂親睦派の御三家であります。

そこで、会長の後任者として、彼等は、歌によってクラブ親睦を盛り上げたHarry Rugglesを選びました。

そして、**宣伝拡大委員長の後任者**としては、Chesley R. Perryを選びました。但し、彼らはその選任に際してChesley R. Perryに因果を含めました。即ち、「このクラブが紛糾するのは、シェルドンが奉仕、奉仕と言って子クラブ作りをやりすぎたからである。したがって、クラブ親睦を崩さない程度にして欲しい。その代り、Harry Rugglesの会長が終わったら1910年度の会長に推薦するから、それを一つ楽しみにして、出来るだけ不真面目に且つ一生懸命に宣伝拡大の仕事をして欲しい」と、このように因果を含めたわけでありました。

ところが、ポール・ハリスがこのことを聞いて、その夜、Chesley R. Perryに電話をかけました。ポール・ハリスの晩年の追想録によれば、

『長時間にわたって、色々意見を交換したが、二人の間で何を話し、彼がどのように答えたかは、一切記憶の中にない。ただ、話が終わって受話器を置いたときには、Chesley R. Perryが私の心を十二分に汲み取ってくれていたことを私は確信していたのである』となっています。

要するに、ポール・ハリスの説得によってChesley R. Perryがひっくり返ったということであります。

そこで、蓋を聞いてみると、Chesley R. Perryはシェルドンと全く同じことを繰り返しましたので、シカゴ・クラブの親睦は、またまた崩れ去りました。

しかし、Chesley R. Perryは、偉大な組織管理者でありましたから、悪戦苦闘しながらも子クラブを作って行ったのであります。

先ず1908年にクラブ”No.2のサンフランシスコロータリー・クラブ。そして1909年には、オークランド、ロサンゼルス、シアトル、ニューヨーク、ボストンというように作って行って、1910年には、15の子クラブが出来上がっていたのであります。

しかも、Chesley R. Perryの偉いところは、ただ単に子クラブを作っただけではありません。作りながらもシカゴのクラブは荒れに荒れます。それを見ながら彼は解決の道を模索したのであります。即ち、

1. 先ず、ロータリー運動にとってクラブ親睦は絶対に必要か。答えは明らかにイエスであります。しかし、それでは奉仕理念を提唱し、子クラブを作ることはできません。
2. では、ロータリー運動にとって、奉仕理念を提唱し子クラブを作ることは、どうしても必要か。これも答えは明らかにイエスであります。しかし、そのことによって、クラブ親睦は崩れ去ります。

この一方を立てれば他方が立たない、という相矛盾する要請を両立させる組織を作らなければならないと考えた結果、Chesley R. Perryは、1909年の末頃に、一つの発想を得ました。それが、**連合組織体構想**であります。

その構想というのは、シカゴ・クラブで奉仕理念を提唱すれば、クラブ親睦が崩れます。しかも、シカゴ・クラブが子クラブを作るということは、クラブにとっては荷が重い仕事であり、結局、親睦も崩れて行きます。したがって、この二つの仕事は、ロータリー・クラブとは別枠の団体を作って、その団体に委託すれば、クラブの親睦を崩すことなく、奉仕理念の提唱も出来るわけであります。

そこで、既にシカゴ・クラブを含めて16のクラブが作られていましたから、これら16のクラブが連合体を作って、その団体に、**奉仕理念の提唱とロータリーの拡大**という二つの仕事を委託すればよい。そして、各クラブは、この連合体の活動に協力しながら、それぞれの自主独立性を保って親睦を守って行く、という見事な図式を作ったのが1910年のことでありました。

このようにして**全米ロータリー・クラブ連合会**が成立したのであります。

なお、1911年に至って、この二つの仕事の他に、連合組織体に適した仕事として

3. 情報の媒介という仕事を付け加えています。

そして、この団体が1912年に国際ロータリー連合会と名称を変え、更に1922年に現在の国際ロータリー即ち、RIとなったのであります。

ところで、全米ロータリー・クラブ連合会初代会長を選任するについては、皆、心の中ではポール・ハリスを選任すべきだとは思いつつも、1907年からクラブ親睦を踏みにじった経緯がありますから、何時まで経っても決議が出来ませんでした。しかし、時の会長 A.M. Ramseyは、もうこれ以上待たせるわけにはいかないと、彼一流の雄弁をもって会員を説得し、ポール・ハリスを全米ロータリー・クラブ連合会の初代会長に選出する決議を取り付けました。

その論法は、どのようなものかと言いますと、

- ① 先ず、シカゴ・クラブが全米ロータリー・クラブ連合会において**名誉ある指導的地位**を持つべきであること。
- ② その会長としては、ロータリーの理想を推進するという目的から**最適者**を選任すべきであること。
- ③ 誰が会長になるか、ということよりも、**どのような理想を達成すべきか**、ということが大切である。

要するに、人ではなく、ロータリーが大切である。

したがって、ポール・ハリスを選ぶべきだ、という論法でありました。

結局、ポール・ハリスが全米ロータリー・クラブ連合会初代会長に選ばれたのではありますが、あまりに審議が遅れたために、会長任期の残存期間が少なくなっていました。

そこで、これではあまりに気の毒だということで、もう一度、1911年からの会長職を務めることになったのであります。

ところで、ポール・ハリスは、会長として温かく迎えられて反省しました。

自分の考え方の誤りは何処か？

ポール・ハリスは、1907年から親睦団体であるクラブに奉仕の概念を入れよとしました。この時の彼の考え方は、『始めに親睦ありき』、その上に高次の概念としての『奉仕』が出てきたのだから、それが親睦と相容れない時には、親睦を抑えて奉仕が生きるべきだという立場をとりました。

その結果、当然のことながら、親睦が崩壊してしまいました。そこで、ポール・ハリスは、ロータリーにおける親睦と奉仕とを上下の関係において捉えたことの誤りに気づきました。

『親睦と奉仕とを同じレベルの概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。したがって、親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る』と悟ったのであります。

ポール・ハリスは、その気持ちを全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文“Rational Rotarianism”であります。

これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というものは、どのような特徴を持ったものなのか、ということ解説したものであります。

ポール・ハリスは、1910年、全米ロータリークラブ連合会の初代会長に選任された時から稿を起し、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だ機関誌がなかったので、これを発表する場がありませんでした。そこで、チェスレー・ペリーに相談したところ、チェスレー・ペリーは喜んで、彼が編集委員長になって出来上がったのが、“The National Rotarian”でありました。この機関誌は、やがてロータリーが国際的に発展するにおよびNationalがとれて現布の“The Rotarian”となったのであります。

これが、この論文を巻頭論文としたロータリーの公的機関誌創刊号発刊の物語であります。時に、1911年1月26日のことでありました。

ところで、“Rational Rotarianism”においてポール・ハリス曰く

『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】(toleration) と答えるであろう』

これがポール・ハリスのロータリー理論であって、ロータリー＝寛容論であります。したがって、彼は『ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る』と説いたわけでありました。

「ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。寛容な心を持つこと。自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の世界の中にロータリーはある。」

これがポール・ハリスのロータリー論でありました。

以上、申し述べましたところが本日の第一の論点であります。

次に、第二の論点に移ります。

さて、ポール・ハリスやシェルドンによって、**伝統的な理論**が確立される最中であって、1910年以降、ロータリーには、また別のある種の胎動があり、その胎動と伝統的理論派との葛藤の中から、1923年、セントルイスの国際大会においてロータリーの般若心経とも謂うべき決議23-34号が採択されるに至るのであります。

その胎動とは一体何か？

それは、1910年当時、全米に澎湃(ほうはい)として起こっていた身体障害者養護学校が存在していなかったために身体障害者の教育の機会が奪われているというのでこの制度の欠陥を是正しようという民間でありました。

そこで、一部のロータリー・クラブが、これに対して、クラブの財源を使って身体障害者養護学校を作り上げて行ったのであります。

さて、この運動の最中であって、一頭地優れていたのが、オハイオ州エリリアロータリー・クラブの**Edger Allen 通称"Daddy Allen"**でありました。

1917年、彼は、この身体障害者養護学校設立の動にエリリアロータリークラブの財源を使って加わりました。

この時、彼が偉かったは、この種類の運動というのは、アメリカに澎湃として起こっているが、先例に乏しいので、アメリカの何処かの地方にこの種類の学校を建てる時に、

- 1 用地の取得はどのようにすればよいのか。
- 2 建築費は、どのようにして集めたらよいのか。
- 3 建物の設計は、何処に頼めばよいのか。
- 4 先生の確保は、どうすればよいのか。

等々のことを先例のないところで皆が善意の力を結集しても、エネルギーロスが多いだらうから、この種類の経験者を共通にプールする情報の媒介機能を持つ団体を作っておけば、最小のエネルギーをもって最大の効果を上げることが出来るだろうと考えたのであります。

そこで彼は、**身体障害者養護協会**というものを設立して、その初代の理事長に就任して一躍この運動の頂点に立つことになりました。

ところが、出る杭は打たれる、の譬え通り、Edger Allenに対するロータリー側の批難攻撃が集中するに至ったのであります。

Edger Allenは、素朴なロータリアンとして、立派なことをしているのですが、理論武装の点からすると弱かったのであります。

ロータリー・クラブがクラブ財源を使って身体障害者養護学校設立の運動に携わり、これがひいてはロータリーの社会的信用を高めることに大いに役立っているにも拘らず、理論武装をしたロータリアン達は、それはロータリーの本体的な奉仕ではないと主張します。

即ち、ロータリーの奉仕というものは、一人ひとりのロータリアンが、例会で心を磨き、その精

神を向上させることであって、実践のことは、ロータリアン各自が**個人奉仕として実践**するのが本来であるというのであります。

奉仕の心を作れば、その反射的な効果としての物の供給即ち、奉仕の実践は自然にもたされるだろうというのであります。

したがって、クラブ財源を使う奉仕団体などは、ロータリーにおいては、あってはならないものであるというのであります。

しかし、Edger Allenとしては、立派なことをしているのにこのように批難攻撃受けるので、何とかしなければならぬとは思いますが、自分の力では何ともならないので、さて、どうしたものかと、彼は沈思黙考したのであります。

そして、1922年にアイデアが浮かびました。それは、自分の力で出来なければ、出来る人を探せばよいと考えたのであります。そこで、考えついたのが、ロータリーの始祖ポール・ハリスでありました。

1922年にEdger Allenがポール・ハリスに宛てた手紙が今日残されています。即ち、『自分は、エリリアのロータリークラブの会員として、クラブの団体財源を使って、身体障害者養護学校の設立に成功し、これがロータリーの社会的信用を高めるについて大いに預かって力があつたにも拘らず、理論派のロータリアン達は、それはロータリーの本体的な奉仕ではない、と言って責めてきます。そこで、いろいろ考えた結果、貴方なら、私のこの苦しみを救ってくれるに違いないと思ってこの手紙を差し上げている次第です』と。

これに対して、ポール・ハリスの返事が、今日残されていまして、その返事は3点より成り立っているのであります。即ち

『第1に、私はあなたを責める理論が間違っているとは思いません。

第2に、さればと言って貴方が実践している奉仕がロータリーに反するとも思いません。

そこで、

第3に、この問題についての両説を調和させる原理が何処かにある筈でありますから、この問題については、次の年度の国際大会の正式な議決を取り付けることにしましょう』

ということになっているのであります。

ところで、ポール・ハリスは、一人のロータリアンにすぎませんから国際大会に対する提案権は各クラブにあります。しかし、彼は、国際ロータリーの名誉会長でありましたから、国際ロータリーの理事会を動かしたに違いないと推測されるのであります。

そこで、この問題を解決する案件が1923年セントルイスの国際大会の34号議案として提案されました。従って、これについての決議を「**決議23-34号**」と呼ぶのであります。

この**34号議案**については、ロータリーの国際大会の歴史の中でも最も喧嘩の激しかった大会でありました。ロータリー分裂の危機があった、と謂われるくらい物凄い喧嘩をしたのである。

因みに、最も良質な討議が行われたのは、これより10年前の1913年、ニューヨーク州のバファ

ローの国際大会でありました。この時は、参加者総数250人くらいで、Convention of inspirationと呼ばれています。何故かと言いますと、この国際大会では、1915年にサンフランシスコの国際大会で採決された【全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓】、別名【ロータリー倫理訓】の審議が始められたからであります。したがって、Convention of inspirationと呼ばれるに相応しい良質な討議が行われたのであります。

さて、1923年の国際大会に提案された34号議案につきましては、アーサー・F・シェルドン (Arthur Frederic Sheldon)、Guy Gundaker、Dr.Allen D.Albert等のロータリアンは、『このような団体奉仕は、ロータリーの奉仕とは認めないよ』と主張します。Edger Allenも、ここまで来ると引っ込んでいけるわけにはいきませんから、『これがロータリーの奉仕でなくて、何がロータリーの奉仕だ』と反論します。

そして、双方とも相譲らないのであります。

その結果、『もう議論は止めよう。君達は君達のロータリーをやればよい。私達は、私達のロータリーをやろう』と謂うことになったとき、これは証拠がありませんが、明らかにポール・ハリスが裏で動いていたと推測されるのであります。ポール・ハリスの意を受けて名乗り出たのが、1922～23年度のシカゴ・クラブ会長のWilliam Westbergとテネシー州ナッシュビルロータリークラブの会員Will R. Manier Jrでありました。そして提案しました。

『双方とも暫しお待ちあれ。ロータリーというものに学び合うところにその本願がある。したがって私は私のロータリー、君は君のロータリーというものの本質が崩れてしまう。そこで、我々は、ここに、この対立を調和せしめる原理というものを用意しているので、原案に替えて、我々の提案を審議願いたい』と提案したのであります。そこで皆がハット気が付いて、

『成る程、ここで別れて何になるものでもない。あなた方の提案を審議して、調和のとれた原理に基づいて、双方が立てるようにしよう』ということになって決議に漕ぎ着けたのが決議23-34号でありました。

即ち、この2人によって共同提案された代案である34号議案について、大会決議を取り付けることに成功したのであります。

Will R Manier Jrは、この功績によって、1936～37年度の国際ロータリー会長に選任されており、決議34号の文章者を見ると、これは大変な人物であることが判るのであります。

彼らは、一体どのようにしてこのドキュメントを書き上げたのかと言いますと、彼らは、1907年以降のロータリーの奉仕哲学上の原理原則を全て柱立てて理解していたのであります。決議34号の代案を書く時に、二つの目的があったのであります。即ち、第1は、ロータリーの原理の世界には色々な葛藤があったが、この葛藤をここで悉く解決しておこうということ、即ち、初期ロータリアンのありとあらゆる原理的な試行錯誤を悉く国際大会の決議をもって解決しておこうということ、これが一つであります。

第2は、その枠組みの中で、**Edger Allen**が提唱しているような団体的金銭的な社会奉仕をロータリーの正当な奉仕の一環として、どのようにして組み入れるべきか、ということ、これが一つであります。この二つの要素をくみ取ることが出来るのであります。

なお、決議34号は、表面的には、シェルドンその他伝統的理論派と**Edger Allen**との争いでありますが、ロータリーの原理形成の面から分析しますと、伝統的理論派と1914年度の国際ロータリークラブ連合会会長**Frank L. Mulholland**との争いであったと言えるのであります。

ポール・ハリスは、この時は**Frank L. Mulholland**に加担したのであります。

Frank L. Mulhollandがこの運動に拘わるようになった動機は、次のようなことであります。即ち、彼が、朝の散歩をしているとき車椅子に乗った子供に出会いました。そこで、この年頃の子どもは今頃は、学校で勉強していなければならないので、その訳を聞きますと、『**自分は身体障害児であるために学校に行くことができません。しかも、私学は学費が高いので行くことが出来ません**』というのであります。

そこで、彼は、この子は身体に障害があるばかりに、憲法が保障している教育を受ける権利・教育の機会均等が奪われている。これは由々しきことであるというので身体障害児養護学校設立の運動に身を投じるようになったのであります。

さて、**決議23-34号**は、ロータリーの思想体系を整理した最初にして最後のドキュメントであります。それは、ロータリーの世界における**般若心経**ともいべきものであり、キリスト教のバイブル、道元禅師の正法眼蔵のように時代の変遷に耐えるものとして、全てのロータリアンの心の支えとなるものであり、正に思想が結晶化したものであります。

手続要覧の中で哲学的なものは、この決議23-34号だけは、お経のように読みますと、ロータリーというものの本体を容易に明らかにすることが出来るのであります。

決議23-34号は、6項目から成り立っています。第1項から第5項までは総論であり、6項目が各論であり、社会奉仕の準則を規定しています。

総論の第1項～第5項の内容は、ロータリーとは何かということを説いています。即ち、この中で、初期ロータリーの試行錯誤を全て最終的に解決するという形をとっているのであります。ロータリーがこのようなものであるから、したがって、第6項に**各論**として、団体的、金銭的奉仕プログラムを組むに当たっては、次の準則によるべし、という具合になっているのであり、このルールを踏まえて、**団体的社会奉仕の企画、立案、実施**をすることが望ましいのであります。

以上のように、決議23-34号は、非常に広い範囲でロータリーの原理原則を定めているのであります。これを読むことなしにロータリーを語ることは出来ないということになるのであります。

以上で、初期ロータリーの歴史の概説を終わりたいと思います。御静聴ありがとうございました。



(左から):ガスターバス・ローア、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレー、ポール・ハリス(1905～12年頃)

(出典)

2012-13年度 第2550地区IIM 講演「初期ロータリーの歴史」

講師 RI第2680地区 深川純一パストガバナー

2012-13年度 RI第2550地区ガバナー月信総集編より

鈴木宏ガバナー(宇都宮北RC)

編集:杉田 博